

## 武蔵学園建学の理想と山本良吉の教師論

―閉塞的時代をリードした気骨あふれる教育者―

黒澤英典

はじめに

山本良吉は、加賀藩《藩校〓明倫堂》の伝統を継承する金沢専門学校（後に石川県専門学校）さらに、一八八六（明治一九）年の学制改革によって第四高等中学校となったこの学校で学んだ。後に《加賀の三羽鳥》と言われた『善の研究』で近代日本を代表する哲学者・西田幾多郎、『禪の研究』で世界的な宗教思想家・鈴木大拙、そして山本良吉は同級生で共に学んだ生涯の無二の親友であった。学制改革によって藩校時代の自由闊達な教学の精神を伝統としている石川県専門学校が改組されて第四高等中学校となり、新政府から派遣された校長柏田盛文の追放運動を起し、その中心となったこの三名は学校の方針に絶望し退学した。

その後、西田・鈴木は上京して、東京大学哲学科選科生とし学び、数年後に山本も二人の後をおって上京し東京大

学選科生として学んだ。

山本は、その後二人とは異なり中等学校等の教師として、明治・大正・昭和（戦前・戦中）激動の時代のわが国の中等教育界をリードする異色の教育者として活躍した。

本稿では、山本良吉の生涯をかけた中等教育実践の軌跡を辿り、彼の教育信念を探りつつ、教育的信念の結晶である『若き教師へ』を中心として、山本の理想とする教師のあり方について述べておきたい。

なぜなら、今日わが国において、子どもの学力低下が問題視され、教育に携わる教師の資質・能力、さらには教員養成のあり方が広く問われている。こうしたとき、山本良吉の教育観・教師論は混迷しているわが国の教育のあり方に示唆的であると考えられるからである。

### 一、山本良吉の生いたち……母へのおもい

山本（旧姓金田）良吉は加賀藩士族金田清三郎基之の三男として、一八七一（明治四）年一〇月一〇日、金沢の鶴間谷に生まれた。その後間もなくして一家は、生計のために金沢の東方に位置する大樋町へ移って武士の商法ながら米屋を始めた。母・直は綿から糸を紡ぎ、それを染めて木綿を織って生計を助けた。

山本は子どものころのことを後に、次のように回顧している。

「母は二六歳で私を生み、私が二六歳の時になくなられた。なくなられて二六年目に私は前と変わった生活に入った。五二年間を回顧すると、自分ながら不満足なことばかり。母に対する務めが一部でも果たされるのは何時の事であろう。……冬の朝四時頃出もあつたらうか、……家中は暗いもやに包まれている。母は私を背負って、朝の用意だ

ろう何かをして居られる。これが私の四歳のときの事で、今の私がつけている最も古い記憶である。」<sup>[1]</sup>と母親の思い出を語っている。

父親については「維新後、間もないことで、父は士族の商売として米屋を始めた。毎日足で長い杵をふみ、何俵かをつき、それを売るのが、父の仕事であった。……」<sup>[2]</sup>と述べ、決して豊かな暮らしではなかったことを述べている。

良吉は一八七八（明治一一）年、満六歳で小学校に入学する。授業が始まって読本を読まされると、家では父から『大学』や『中庸』を教わっていたので良吉はそれをすらすらと読んだ。担任の中村敬三先生は、驚いて「お前はこの級には行けない」と言い、すぐに一級上の組に入れられた、という。一つ年下の良吉が、後に西田幾多郎・鈴木大拙と同級になったのはそのためである。学校は五つも変わったが、その間中村先生には三度も受け持たれた。中村先生は良吉が最初に感銘を受けた先生であった。<sup>[3]</sup>

## 二、石川県専門学校の精神的風土

石川県専門学校は加賀藩の藩校明倫堂の後身啓明学校が明治一三年改編されてできたもので、専門的な学問を受け、大学進学の子備校的な性格をもたせた七年制の学校であった。四年の子備課程と三年の専門部とがあり、専門部には法・文・理の三つの課程があった。

一八八四（明治一七）年に良吉はこの学校に入学したが、その同級生二四名の中には藤岡作太郎、鈴木大拙らがいた。西田幾多郎は、後にこの学校について次のように語っている。

「石川県専門学校は明治の初年或は旧藩のころから設立されたもので、名はいろいろに変わったらしいが、当時に

において外国語で専門の学業を受ける学校であった。……我々以前の石川県の出身者は、文官は固より武官でも、多少はこの学校を通らないひとはなかるう。学生と云ふのは、悉く金沢の旧士族であり、先生と云ふのも、皆この学校の卒業生で、兄貴分と云った風であり、七年の学校と云えば、最下級生の者と最上級生のものとは、可なり年齢の差があるのであるが、それでも誠に親しく、全体が一族といふ様な温かみのある学校であった。それに気風が剛健質朴で、万一風紀を乱すようなものでもあらば、忽ち制裁を加へるといふ風であった。<sup>4)</sup>

石川県専門学校は、先生たちはすべて藩の先輩であり、加賀藩の内輪の学校で、一学年十数名から二十名程度の小さな学校であった。ここでは師弟の關係も生徒の間も、実には和やかなのびのびとした自由な雰囲気があった。

明治の始めの金沢の精神的風土は、一種独特のものであった。加賀藩には伝統的に学問や文芸を重んずる気風があった。しかし、幕末には外様第一の大藩でありながら明治維新では薩長・土肥の後塵を排し、新政府に一人の要人も出しえなかった。

そのエネルギーのはげ口が、学問・文芸にもとめられ、学問によって薩長を見返してやろうという気風があった。このことは、後に薩摩出身の柏田盛文校長の教育方針に反発して第四高等中学校を退学した山本良吉、西田幾多郎たちの行動にも現れている。

こうした加賀藩の学問・教育を重んずる姿勢は、学問を志す者に対しては温かい精神的風土を醸成し、続々と時代を担う学者を輩出した。明治一〇年代から二〇年代にかけて石川県専門学校が世に送り出した明治の文化人は高峰謙吉、三宅雪嶺、北条時敬、さらに山本の同級生には、鈴木大拙、藤岡作太郎、西田幾多郎、木村栄、松本文三朗、下級生には清水澄、小倉正恒、また泉鏡花、徳田秋声などの文学者も同じころ金沢で育っている。<sup>5)</sup>

良吉は石川県専門学校に入学して、小学校とは違う本当の学問を、当時金沢での一流の学者たちから教わった。と

りわけ、北条時敬先生との出会いは、生涯の恩師として指導を受け、協力するようになった。

一八八六（明治一九）年の諸学校令（帝国大学令・小学校令・中学校令・師範学校令）の公布によって金沢には第四高等中学校ができ、石川県専門学校は廃止された。在学中の生徒はその成績によってそれぞれの学力に適した学級に編入された。良吉たちは新しい学校に大きな期待を持っていた。

しかし、「第四高等中学となつてからは校風が一変した。つまり、一地方の家族的な学校から天下の学校になったのである。当時の文部大臣は森有礼といふ薩摩人であつて、金沢に薩摩隼人の教育を注入すると云ふので、初代校長として鹿児島県の県会議長をしていた柏田といふ人をよこした。その校長についてきた幹事とか舎監とかいふのは皆薩摩人で警察官などしていた人々であつた。師弟の間に親しみのあつた暖かな学校から、忽ち規則づくめな武断的な学校に變じた」。

これは明治新政府の教育方針で、伊藤博文が一八八五（明治一八）年に内閣制度をつくつて自ら初代の内閣総理大臣になつた時、側近であつた森有礼を文部大臣に登用し、近代日本の教育政策を任せた。森は帝国大学令・小学校令・中学校令・師範学校令を制定して、日本の学校教育制度の基礎をつくつたのだが、藩閥政府の中央集権制の地盤を強固にするため、地方の自由主義的な学校を廃して、富国強兵、忠君愛国のイデオロギーを鼓吹しようとし、特に大藩で地方主義的な旧加賀藩の家族的な雰囲気のある石川県専門学校の伝統的校風を打ち破るとともに、薩長政権の権威を示そうとした。

開校式に臨み、文部大臣森有礼は「新日本の文明は王政維新の結果である。王政維新は聖天子の御明徳によつて成就されたものであるが、能くこれを輔け奉つたのは薩長の旧藩士である。所がこの加州のごときはどうであつたか。殆ど貢献する所がなかつたではないか。考えても不甲斐ないという感じが起ころうであろう。茲に高等学校を設立した

のは、すなわち加州の人物を造る為である」と演説した。

こうして校長柏田盛文は薩摩隼人の教育を行うため、学校的首脳部を鹿児島県から連れてきた者たちで固めたばかりでなく、旧前田藩出身の教師を更迭し、その代わりに「学力の十分でない先生たちを採用した」。

山本良吉たちが尊敬し、石川県専門学校では校長心得に任じられていた北条時敬先生は、校長柏田のこのような教育方針に賛成出来ず、衝突して開校後間もない一八八八（明治二一）年九月に第四高等中学校を辞し、第一高等学校に転任している。

良吉たちは日頃学問・文芸にあこがれ、極めて進歩的な思想を抱いていたのであるが、そういう傾向が喜ばれなくなって、師弟の間に親しみのあった温かな学校から規則づくめな武断的な学校に変わった上、学力の十分でない先生が多い学校に不満を持つようになっていった。

そして、金沢大学附属図書館に保存されている第四高等中学校当時の成績資料によると、明治二〇年度（明治二〇年九月から明治二一年八月まで）予科一級の成績簿では、鈴木大拙は学年試験を受けず退学し、山本良吉は翌明治二一年度に第一学期に行状点で「科業ヲ休マントシテ教員ヲ欺ク」のため退学、さらに西田は学年末まで留まったが、無届け欠席・欠課が多く、また教室内での行状も悪く進級出来ず退学した。

彼らの学校当局に対する抵抗は、最終的には退学という形になって現れるが、その根底にあるものは、近代国家形同期における中央集権的な天皇制国家主義的教育政策の現れである学校教育の現場における規則づくめで、武断的な教育方針にあった。

## 三、第四高等学校退学から東京大学選科生へ

第四高等学校時代を回顧して西田幾多郎は、「四高の学生時代といふのは、私の生涯において最も愉快な時期であった。青年の客気に任せて豪放不羈、何の考慮することもなく振る舞うた。その結果、半途にして学校を退く様になった。当時思ふ様、学問は必ずしも独学にして成し遂げられないことはあるまい。寧ろ学校の羈絆を脱して自由に読書をするに如くはない」と書いているが、良吉の心境も同じであつたらう。彼らは思うがままに行動し、力のない教師をからかったり、文部大臣森によつて全国の学校に提唱された《兵式体操》をさぼつたりして学校当局に反抗した。当時の成績簿などの資料からみて、この頃の主導権は良吉にあつたようである。《駿馬と鈍牛の如く》始めに良吉が行動し、西田がこれに和するといった有り様で、既に述べたように学校に飽き足らなくなった良吉が退学し、西田は落第に甘んじたが、翌年対に退学した。

退学した良吉は、《教育勅語》が發布される一八九〇（明治二三）年二月に、恩師武部直松先生の推薦で石川県共立尋常中学校（大谷中学校）の教務嘱託となり、英語と万国地理を教えた。当時、良吉から英語を教えられた暁鳥敏は、「一番若い先生だったが、生徒は皆先生を敬服していた」と回想している。<sup>11</sup>

先に、上京し東京大学文科大学哲学科の選科生となつている西田から大学の情報と共に、良吉の上京と東京大学受験を勧めている。

この頃、西田は大学での選科生に対する差別待遇の屈辱感にさいなまれ、良吉は青雲の志を抱きながら生来の病弱と家計が貧しいために故郷金沢に呻吟していた。傷ついた二人は互いに励まし合い、逆境の中から立ち上がろうとして、生涯変わらぬ強い友情が育つていった。

良吉は一八九二（明治二五）年七月東京帝国大学法科大学選科を受験することになったが、その学費の捻出については、西田を始めとして恩師や多くの親友の支援なしには実現しえなかった。良吉は教員生活中に蓄えた学資に北条らの援助を加えて、無事大学生活を送る見通しがたった。こうして良吉は、共立尋常中学校（明治二五年より私立大谷尋常中学校と改称）を辞めて上京し、一八九二（明治二五）年九月に東京帝国大学法科大学政治学科選科に入學した。

しかし良吉は、折角入学した政治学科に不満で、西田と同じ哲学科に転科した。同じとき東京専門学校から哲学科選科に転向してきた鈴木大拙と共にお互いに下宿を行き来し、時局を談じ、学問を論じ、悲憤慷慨した。

やがて大拙は鎌倉円覚寺の今北洪川和尚について参禅するようになり、ついに円覚寺に入って大学は中退してしまひ、西田は一八九四（明治二七）年七月には大学を卒業して郷里に職を求めて去った。良吉はこの夏金沢に帰省したおり、西田の就職のために、知人を頼って奔走したが成功しなかった。

良吉は母への思いを、一八九五（明治二八）年秋大学を卒業して京都府立中学へ奉職した直後に帰省したとき、次のように述べている。

「用がすんで帰任する朝、母は送って宅の上なる御小人町まで来られ、都合がつけば又帰れよといくたびとなく言つて、一町の余も見送られた。母の情けが身にしむだけ、返答の言葉はのどから出ぬ。ただ見送つても、眼鏡はくもつてはきりとは見えぬ。」<sup>12)</sup>

しかし、翌一八九六（明治二九）年四月一五日、良吉は母の危篤の電報を受け、当時汽車もない雨の北陸路を帰省したが、最早母の意識はなく、四月一八日に亡くなった。

「一生を貧乏のなかに過し、一切の苦痛をなめ尽くしながら、曾て口にも出さず。独りわが身を縮めて、乏しい中



から少しでも他を楽まされた母は、その苦痛に対し何の報酬も得ないまま、私が一通り学校生活を了へた翌年なくな  
られた。せめて今年御存命であつたならば……」<sup>13</sup>と良吉の嘆きは深かった。

良吉の教育研究の淵源は、一八九四（明治二七）年哲学科の選科生であつた時に始まる、論文集『史海』<sup>14</sup>にルソー  
小伝『ジャン・ジャク・ルソー』を書き、『教育時論』（三二七・三二八・三二九号）には三回にわたって「ルソーの  
教育説」を書いて深い関心を示している。

特に、『エミール』については「欧州の思想俄にこれがために一変し、開発主義の教育界に行われ、知情意の区別  
の心理界に用ひられる、皆其影響にあらざるはなし」<sup>15</sup>と称賛している。良吉は周囲の友人からは将来は政治家か、官  
僚か評論家になると思われていたが、大方の予想に反して、教育界に身を投ずるようになつたのはなぜか。

この疑問に対して、西田は次のように述べている。

「山本君は私より一年遅れて東京にきた。はじめ法科に入った。その頃、誰も山本君は法科の人と考えていた。

……然るに君は暫く法科の講義を聞いていたが、自分は如何にしても法科をやつて行く考えはないと言ひ出した。そ  
して文科の哲学の方に転じた。そのとき以来、教育家として立つといふ山本君の生涯の方向が定まつたのである。山  
本君の心の底には、政治家などとしてどうしても落ち着くことができない、誠実な内面的なものがあつたのであ  
る」<sup>16</sup>。

結局、良吉は親友の西田や大拙の勧めもあつて哲学科に入りなおし、北条時敬先生に相談した結果もあつて、教師  
になることを選んだのであろう。

教師を志ざそうとする良吉は、在学中からしきりに当時代表的な教育雑誌『教育時論』や『史海』などに教育に関  
する論説を発表し、教育界では名を知られるようになっていた。良吉はその文筆活動によって新進気鋭の教育理論家

として認められていたのである。そんなわけで、一八九五（明治二八）年七月東京大学文科大学哲学科選科生を修了後、直ちに京都府立尋常中学校に教諭として採用されたのである。こうして山本良吉の生涯の職業としての半世紀に及ぶ教師生活が始まるのである。

#### 四、気骨あふれる教師としての第一歩

教育者としての山本良吉の決意は、西田幾多郎が「思い出」のなかで語っているように、文科大学哲学科に転科した時以来、教育者として立つという生涯の方向が定まったのである。高い理想を心に秘めて二四歳の青年教師として、一八九五（明治二八）年七月には京都府立尋常中学校教諭として赴任した。彼の中から良吉の教育方針の根幹となる寄宿舎育、漢文であった。さらに、翌年の五月からは、学生寮の舎監となり、これから良吉の教育方針の根幹となる寄宿舎教育が始まることになる。生徒と教師が寝食を共にするということが青年期教育の第一歩と考えるようになった。このもとになるのは、良吉がかって学んだ石川県専門学校での体験であったことは想像にかたくない。この教育理想は、今日の武蔵学園の教育実践のなかに脈々と流れている。

京都府立尋常中学校には一八九七（明治三〇）年四月静岡に移るまで二年間勤めた。この間、西田や大拙との交流は頻繁にあったが、同僚にはあまり親しい友人は出来なかった。この間の良吉の主な著述活動は、次のようなものがあげられる。

「自由意志と倫理学」雑誌『宗教』四三三号（一八九五年）、「私立中学校論」雑誌『教育時論』三七七号（一八九五年）、「性善悪説を評す」雑誌『宗教』四七号（一八九五年）、「哲学の必要」『教育評論』三七八号（一八九五年）、

「習慣論」「教育評論」三八四号（一八九五年）、「支那倫理」雑誌『宗教』（上・中・下）五四号・五五号・五六号（二八九六年）、「我国宗教の前途を如何にすべき」雑誌『如是』四五号・四六号・四七号（一八九六年）、「教師の覚悟」雑誌『教育時論』四〇八号・四〇九号（一八九六年）、「叱り責むること」雑誌『日本の家庭』二巻二号（一八九七年）、「基督教と現今の社会」雑誌『宗教』六五号（一八九七年）、「体罰論」雑誌『教育時論』四三〇号（一八九七年）など多数である。

良吉が静岡県尋常中学校に奉職したのは、一八九七（明治三〇）年四月で、寮の舎監を兼ねている。校長吉田良春は、良吉の教師としての力量に期待して早速寄宿舎を委ねた。

以前の静岡中学校は生徒の素行が悪く、静岡民友新聞（明治三二年五月二日）は次のような記事を載せている。「同校学生の風儀に兎角の風評あり。寄宿生と職員との折り合いも宜しからざりし事などありしが、近頃吉田校長は熱心にこれらの弊害を矯め寄宿生取締の上にも充分に注意して学校の模範となさん覚悟にて寄宿舎も成るべく新学生も多く入舎せんことを望み居れども何故にや入舎する者少なき由、将来有為の人物となるべき中学生などは窮屈なる而うして規則正しき良き習慣を養ふが肝養なり」と。<sup>17</sup>

さらに、『静岡中学高校百年史』にも『山本教諭が寄宿舎改良』と題して、「多くの小さなもめごとがあったのだらうか。明治三〇年四月から満三年、静中の英語、修身の担当であった山本良吉教諭が校長の意を体して寄宿舎の改良をおこなった」とある。<sup>18</sup>

静岡中学で良吉を慕って転校して京都二中でも教え子となった竹内薫兵は、「先生は大学を出られて京都一中へちよつと就職し、間もなく静中へ来られた二十五歳と言う若さのとき、善に向かつてどしどし実行するしかもむき出しの性格、私だけではない。誰もこわい先生と評し合った。……静中の校風を樹立する立役者だった」と述べている。<sup>19</sup>

一九九〇（明治三三）年四月一日京都二中に転任する送別会の演説の中で良吉は、「静岡の生徒はものわかり安く伶俐なり。余は静岡に来て生徒の物分かり安きに驚きたり。然れども其裏には悪賢くして困難を侵して何処までも成し遂げんとする事少なきを意味せり。困難は実に人間に必要なものなり。艱難汝を玉にす、等の金言もある如く、艱難を凌ぎて事を為せば立派なる人になるなり。今日は勉強するは好しからず、何々の事柄は困難なれば為すを好まずとて困難の為に事を為すを止めては、立派なる人間になる事能はず」と縷々困難に立ち向かうべきことを述べた後、「最後に臨して諸君が益々困難を侵して、立派なる偉き人になら事を望むと結ぶと、満場肅として声なし」と書かれている。

静岡県尋常中学校在任中（明治三十一年四月から明治三十三年三月）の主な教育に関する著書及び論文は次の通りである。

著書は『倫理学史』富山房一八九七年六月刊行、論文は次の通り、

「倫理教科書の査定」雑誌『教育時論』四三五号（一八九七年）、「社会と女子」雑誌『日本人』四四号（一八九七年）、「文学と宗教」『宗教』七二号、「尋常中学校作文教授意見（上）（下）」雑誌『教育評論』四五一・四五二号（一八九七年）、「学校管理」雑誌『教育時論』四五六号（一八九七年）、「教師と倫理修身」雑誌『教育時論』四五九号（一八九八年）、「中学校倫理教授及訓育私見」雑誌『教育時論』（上・中・下）四六七・四六八・四六九号（一八九八年）、「尋常中学校英語教授細案」（一）（二）（三）『教育壇』七・九・一〇号（一八九八年）、「教育家と理想」『静岡県教育協会雑誌』一一七号（一八九九年）、「倫理修身検定試験」雑誌『教育時論』五〇七号（一八九九年）、「明治の三世」『静岡県教育協会雑誌』一二六号（一八九九年）、「修身教授と教師の覚悟」『静岡県教育協会雑誌』一二九号（一八九九年）、「教育家と人間てふ念」雑誌『教育時論』五二二号（一八九九年）、「特許学校監督者と検定委員に望

む」雑誌『教育時論』五二六号（一八九九年）、「宗教と道徳」『六合雑誌』二二七号（一八九九年）、「採点の原理」雑誌『教育時論』五三一号（一九〇〇年）、「小学校教師に呈す」『静岡県教育協会雑誌』一四四号（一九〇〇年）など多数。

## 五、京都府立第二中学校へ

良吉は静岡中学で舎監としてその校紀の肅清に敏腕を振るったので、新たに創設される京都府立第二尋常中学校長中山再次郎は、前に京都府立尋常中学の校長であった京都府視学官本庄太郎からの推薦で、良吉を是非教頭として迎えたいと思い静岡を訪れた。

中山校長は静岡に着くや直ぐ、良吉に面会を申し入れ会った。

「……何かと世間話や何かして、別にむずかしい教育談訓育論などは気をつけてしなかつたので別れる時に私《それでは来ていただけでしょうね》山本《きつと行きます。学校のことは少しも御心配に及びません。十分やります》私《それでは頼むよ。二中はどこまでも二人でやるつもりで来てくれ給へ》これが最後の言葉で私は喜び勇んで京都へ帰って来たのです。以来八年、山本先生に対して、私もこの時静岡で山本先生に誓った言葉をかえなかつた積もりです。又山本先生もあの時の意気込みを十分に發揮せられて、二中は創立後数年たたぬうちに一種の模範中学となつて、参観校長引きも切らずといふ隆盛を見るに至つたのです。右の様なわけで、時には京二中の名目の校長と實際の校長と二人校長があるといわれた訳も、生徒から鬼山本といわれるほど山本先生が全力を振るはれたわけも分かると思います。」<sup>22)</sup>

京都二中では寄宿舎を《俗風塾》と名付け、良吉は専心塾生を指導し新しい校風の確立に努めた。

良吉は「我が校新たに設けられたり、学校に最も要せられるものは氣風なり、将来我が校の氣風を造る者は今の我が校なり。今の我が校の氣風は今の生徒の氣風による。今の生徒たるもの深く自ら戒めざるべからず。善良なる氣風を造るには他の道なし。ただ各自が自己と学校との体面を重んずるにあり。体面は虚飾によりても人爲によりても、動作によりても維持すべからず。ただ自己の品位を重んじ恥を知る真心によりてのみ維持すべし」と訓辞した。<sup>23)</sup>

良吉はまた京都二中『学友会誌』(二二号)に「至誠説」と題して、誠と言うことの大切さを説いている。

「至誠な人は常にすべき事をして、したい事を抑える。マジメな人はたとひ誰が何といつても、すべきことはする。自分の身体が危うくても、自分の命がなくなつてもかまわない。至誠の前には欲も得もない。これだから至誠の人は立派だ、見事だ、又畏ろしい。あの楠公を人がなぜ尊ぶのか。度量においては尊氏より狭かつたかもしれない。勿論秀吉よりも狭かつたろう。策略は上手であつたろうが、得意ではなかつたろう。けれども人がこれを尊ぶは、全く其の君の為に一心になり、忠誠動かず、死んでもかまわなかつたからである。昔から立派な感心だと言われた人は誰を見ても、皆此のマジメさがある。<sup>24)</sup>」

京都二中で良吉は静岡時代にも増して校長の後楯があつたので彼の理想とする青年教育を実践することができた。こうした教育実践を通して、次第に理想の教師像や教育観・学校観が、良吉の内面に確立されてきた。

良吉は京都二中在職中にも、時に自己の理想とする学校を創立して自己の理想に従つた教育をしようという考えを持ったこともあつた。この点、大拙の書簡「君が自ら学校を立て言ふ大に可し」<sup>25)</sup>からも推測できる。

在職八年の間、良吉は中学校教育の理論家として、多くの著作を著し、代表的な教育雑誌に自らの教育実践の成果

を次々に発表した。文部省は良吉の二中での実践を高く評価して、各府県に訓令をだして、良吉の実践した教授法をモデルするよう全国の中学校に指示した。

良吉は、京都府立第二中学校教頭として、さらに中等学校の理論的指導者として、また優れた教育実践者として其の存在が高く評価された。

一九〇八（明治四一）年三月退職して、同年六月には京都帝国大学学生監（高等官六等）の辞令を受けて赴任するのである。

京都二中在職中一九〇〇（明治三三）年から一九〇八（明治四一）年の間に発表した彼の著書及び教育に関する主な論文は、次のようなものである。良吉二九歳から三七歳の教師として最も充実した日々であった。

著書 『実践倫理要綱』五車楼一九〇〇（明治三三）年、『実践倫理札法編』五車楼 一九〇一（明治三四）年、『実践倫理医術編』五車楼 一九〇三（明治三六）年

論文 「京都府第二中学校教諭山本良吉氏よりの書信」『静岡県教育協会雑誌』一四五号（一九〇〇年）、「女子中等教育の標準」『六合雑誌』一三三三号（一九〇〇年）、「教育家と宗教」『教育学術界』一卷八号（一九〇〇年）、「倫理教授断片」『教育学術界』一卷二一号（一九〇〇年）、「中学校補修案」『教育時論』五五九号、「教員待遇の二法」『教育時論』五七四号（一九〇一年）、「中学校より身たる我学風」『教育時論』六〇四号（一九〇二年）、「至誠説」『京都府立二中校友会誌』二号（一九〇二年）、「如何なる中等教師を養ふべきか」『教育界』二巻一號（一九〇二年）、「俗風塾」『京都府立二中校友会誌』三号（一九〇二年）、「教員の制服」『教育時論』六七一號（一九〇三年）、「中学校国語教授上の要求」（上）（下）『教育時論』六八三・六八四号（一九〇四年）、「教授用博物館」『教育時論』七六七号、「学生元氣問題」『教育学術界』一三巻七号（一九〇六年）、「教師用参考

書の制限」『教育時論』七八七号（一九〇七年）、「教師の嗜好」『日本及日本人』四五三号、「中学校に於ける  
性行考定（一）（二）」『教育学術界』一五卷一・二号（一九〇七年）、「中学生の好悪する学科」『教育時論』八  
〇三号（一九〇七年）

## 六、京都大学学生監時代とその後

良吉は京都帝国大学学生監として就任するが、その経緯は良吉が京都二中を辞したいと言う希望を持っていることを  
知った北條時敬は、この信頼する愛弟子のために一臂の労を取ろうと、学習院その他への転任を考えたが、折りから  
親友の岡田良平が総長していた京都帝国大学で学生監として学生訓育にも実績のある有能な人材を求めていることを  
知り、良吉を責任者として推薦した。

岡田良平は北條の推薦でもあり、地元の京都に中での良吉の名声をよく知っていたので、喜んで採用することにし  
た。

良吉は一九〇八（明治四二）年一月一七日京都帝国大学学生監の職に就く決心をし、総長に其の旨を告げた。

京都帝国大学学生監高等官六等の正式な辞令が出たのは六月三〇日出る。なお一九〇九（明治四二）年九月から  
第三高等学校教授を兼任し、倫理学を担当した。

京都大学に奉職した一〇年は、学生生活の改善善導に明け暮れた日々であった。学生への講義は持たなかったが、  
個人的に良吉から指導を受け、感銘を受けた者も多かった。

良吉が長年中等学校で、単に教育理論家としてのみでなく、教育実践家として、とりわけ舎監として生徒達の生活



指導の実績も高く評価された結果、京都大学に迎えられたものであろう。

寄宿舎については、良吉はその運営について特に心を砕いたようだが、中等学校時代と同じく京都大学でも、寮生をもって京都大学生の精神的な中心にしようとした試みなのである。

一九一〇（明治四三）年九月には、畏友西田幾多郎が京都帝国大学助教授となって金沢からやって来た。

既に述べて来たように、良吉は熟慮重ねた上で自ら可と信ずるに至った事柄については、独断猛進するところがあつた。寮の改築問題など寮生を無視したため事態が紛糾したことなどあつた。

彼の日記によると、一九一三（大正二）年七月一日京都帝国大学総長沢柳政太郎と懇談し注意を受け、七月四日には生徒監を辞することを考えた。

しかし、七月三十一日北條時敬と会った時、北條の意見は沢柳総長は自分の意見を露骨に言うが、他意はないから生徒監の地位を辞するなど言う。

沢柳政太郎（一八六五―一九二七）は明治三〇年代から大正期にかけて、文部官僚、東北帝国大学初代総長、京都帝国大学総長など歴任したが、教授の任免をめぐって学内で紛糾し総長を辞任し《公の学校では真の教育は出来ない》との信念のもとに、私立学校それも小学校教育の重要性を説き、一九一七（大正六）年に成城小学校を創設して校長を務め、大正自由教育の提唱者として教育界において重要な役割をはたした。

沢柳の手柄からいって、自ら信ずるところに向かつて独断猛進する良吉の態度に共感できなかったたのであろう。

当時の良吉の日記からすると、既にこの時、良吉は京都帝国大学学生監を辞する決意が出来たのであろう。

その後、良吉は一九一八（大正七）年四七歳で、石川県専門学校以来の恩師北條時敬が東北帝国大学総長から学習院長になった折りに招かれて京都帝国大学学生監を辞めて学習院教授となる。京都帝国大学学生監時代（一九〇八年

から一九一八年）良吉三七歳から四七歳までの一〇年間の活動は人生の最も充実した時代であった。この間の著書・教育関係の主な論文は次の通りである。

主な著書は次の通りである。

『中学研究』同文社（一九〇八年）、『中学修身教科書』（巻一―巻五）光風館（一九〇九年）、『中学修身教科書備考』光風館（一九一〇年）、『静修書目答問』博文館（一九一二年）、『発動主義の教育』弘道館（一九〇三年）『大正女子修身書』（巻一―巻四）弘道館（一九一四年）、『大正修身諸備考』弘道館（一九一五年）、『大正中等修身』（巻一―巻五）弘道館（一九一七年）等

主な雑誌論文

「中学校修身教授に対する難声」『教育学術界』一五巻号（一九〇八年）、「教師及び校長論」『教育学術界』一九巻一  
号（一九〇九年）、「第七回全国連合教育会」『教育時論』八七九号（一九〇九年）、「校課及宅習」『教育時論』八八〇  
号（一九〇九年）、「値なき人物」『日本及日本人』五二三号（一九〇九年）、「高等学校教授録考一法」『教育界』九卷  
四号（一九一〇年）、「普通教育における博物教授法」『教育界』九卷九号（一九一〇年）、「修身教授授」『教育時論』  
九二〇号（一九一〇年）、「我国普通教育の前程」『教育時論』九三〇号（一九一〇年）「勅語教育上の注意」『教育時  
論』九三五号（一九一一年）、「我臣民忠君思想の実態」『太陽』一七巻一二号（一九一一年）、「中等学校授業料の増  
加」『教育時論』九五二号（一九一一年）、「鍛練教育からみた師範学校」『教育学術界』二四巻四号（一九一一年）、  
「修学旅行」『教育時論』九五七号（一九一一年）、「鍛練教育」『太陽』一七巻一六号（一九一一年）、「試験廃止問  
題」『太陽』一八巻二二号（一九一二年）、「教育者の声」『日本及日本人』五七七号（一九一二年）、「学校の規律」  
『教育時論』九五五号（一九一二年）、「京都大学学生気風」『中央公論』二七巻二二号（一九一二年）、「教育はして居ら

〔ぬ〕『帝国教育』三五七号（一九二二年）など。

## 七、学習院における挫折の日々

学習院の起源は、一八四五（弘化二）年に公家子弟の教育のために京都御所建春門前に設立された学習所（学習院ともいう）であるが、一八七七（明治一〇）年皇族・華族の子弟の教育のために東京で再開され、一九八四（明治一四）年に宮内省直轄の官立学校となった。

学習院長陸軍大将乃木希典が大正元年九月明治天皇大喪の日に殉職した後、軍人の院長が長く続いた。そのため、学習院の父兄層の間に文人の院長を望む声が増え、また学生間の綱紀の緩み現れてきたため、宮内大臣波多野敬直は文部大臣岡田良平の推薦により、東北大学総長であった北條時敬に学習院長への就任を懇願した。こうして北條時敬は学習院長に就任したのである。

良吉は一九一八（大正七）年三月一三日学習院教授に発令された。この間、良吉は北條の求めに応じて、ようやく成果があがりつつあった京都大学学生監の職を捨て、恩師北條の懇願に意を決して三月に学習院に移り、最も尊敬する恩師北條のもとで山本一流の厳格な教育を実行しようとしていた。しかし、学習院の教授の多くはこれに賛同しやうとしなかった。

二年間の歳月が流れた。しかし、この間、良吉は、ただ学校のため、学生のため、終始努力を続けた。だが、当時社会的に大きな勢力を以ていた学習院父兄の会は、初めての文官院長たる北條の教育を規律がなさすぎるとして批判し、再び陸軍大将を院長に押すことに逆転してしまった。北條が辞任した表面上の理由は、学習院の大学昇格問題が

一旦院長の發議で承認されそうになりながら、学習院の評議会で否定されたことであつたという。

一九二〇（大正九）年四月五日北條時敬が学習院長を辞任した直後、良吉も休職を願ひ出て学習院を去つた。学習院時代は著書・論文等寡作であつた。

著書

『大正中等修身備考』弘道館一九一八（大正七年）

論文等

〔教育時言〕新学年における教育者の覚悟／両高等師範の国民道徳科／国民道徳の研究法／公民道徳調査の第一歩／中学校教師に激す等』『太陽』二四卷五号（一九一八年）

〔教育時言〕文部大臣の大功績／大学と分科等』『太陽』二四卷七号（一九一八年）

〔教育時言〕学士院授章／国民思想善導等』『太陽』二四卷九号（一九一八年）

〔教育時言〕東京府知事と教育／中学校の女教師／国民道徳緒論等』『太陽』二四卷一〇号（一九一八年）

〔教育時言〕宗教大学／岡田文相に望む／時局と教育／師範教育の困難』『太陽』二四卷一一号（一九一八年）

〔教育時言〕岡田文相の功績／米騒動の教訓』『太陽』二四卷一二号（一九一八年）

〔教育時言〕国体擁護の急務／教師の制服／外国語学校問題／とう』『太陽』二四卷一四号（一九一八年）

〔教育時言〕講和第一年の教育事業／注意せよ中等教員／工科大学の拡張あ』『太陽』二五卷一号（一九一九年）

〔教育時言〕私立大学教授俸給国庫補助／中等教員待遇上進方法／高等教員養成費』『太陽』二五卷二号（一九一九年）

〔七年制高等中学制』『太陽』二六卷三号（一九二〇年）

## 八、欧米教育視察の日々……新たな発見（パブリック・スクール）

北條時敬が学習院を辞職すると同時に、山本良吉は依願退職をした。北條は、良吉が自らと進退を共にして学習院を退いたことに深く責任を感じ、そのため文部省に働きかけて、かねてから良吉が希望していたように、在外研究員として各国の教育事情の視察のため派遣させようとした。

北條は文部省に働きかけ良吉に「欧米における学生生活状況調査を囑託す」という辞令を出させ、同郷の実業家安宅弥吉を説いて、その費用一万円をも援助させたのみならず、帰国後の身の振り方についても相談している。

良吉の欧米視察旅行の日程は、大正九年七月二三日に東京を出発して、八月三日アメリカ到着、アメリカ各地を訪問し、一月にはイギリスに渡り、その後フランス、ドイツ、オランダなどで各地の学校、不良少年施設など見学した。英国滞在中パブリック・スクールのあり方などに深い感銘を受けたことが、後の武蔵高校での指導に強く影響を与えていると思われる。

大正一〇年七月二日に神戸に上陸し、七月五日東京へ着いた。一年に渡る在外研究員生活であった。この一年間の成果が著書『わが民族の理想』に結実し、彼のそれ以後の教育実践に生かされるのである。

一年間にわたる海外の教育事情視察のため帰国した良吉は、我が民族の将来を憂えて、『わが民族の理想』を帰国後発行した。

「序として」次のように述べている。

「周遊一年、言語のわかるかわからぬ数カ国を歴訪した。観察は固より皮相に過ぎぬ。この皮相を透して強く頭に響くものがある。わが民族の将来である。わが国も諸外国もそれぞれ長短あり、一概に自らおごるべきでないと同じ

く、失望すべきでもない。ただ、私が見た強国には全くなくて、独りわが国に存在する憂ふべきものが一つある。その夢から醒めなければ、わが民族は到底世界に大をなすことはできぬ。……」<sup>(26)</sup>

良吉は、此の書の中で歴史教育や国語教育の必要性を説き、日本は中国から高度な文明を輸入し、さらに仏教を移入して独特な文化を作り出したとし、日本民族の道徳の基は感恩であり、家族主義を強調し、正月、節句、氏神祭……などの伝統的行事の保存などを唱え、これらが廃れつつあることを嘆いている。

この間に発表した主な論文は、主として欧米の教育事情の報告であった。

「米国の人物採用法」雑誌『太陽』二六卷一三三号（一九二〇年）

「学校と民本主義」『教育学術界』三六卷三号（一九二二年）

「教育から見た日米問題」雑誌『太陽』二七卷二号（一九二二年）

「米国中等教育の現状」雑誌『太陽』二七卷九号（一九二二年）

### 九、武蔵高等学校の創設と教育者としての成熟期

一九一七（大正六）年九月二四日に、第一次世界大戦後の世界情勢の変化に応じて日本の国力の向上を目指して教育制度の改革が喫緊の課題となった。この課題に因應するために寺内内閣総理大臣の諮問機関として発足したのが「臨時教育会議」<sup>(27)</sup>である。

この会議の答申に基づいて、高等教育の拡張、道徳教育の拡充などが提言された。一九一八（大正七）年一二月には高等学校令が改正された。これにより、高等学校の年限が、高等科三年、尋常科四年と定められ、官立だけでなく、

公立・私立の設置も認められた。

これより先に、山梨県出身の実業家根津嘉一郎は一九一五（大正四）年二月大分県に滞在中、大分県事理官の本間則忠の訪問を受けた。本間は一九一〇（明治四三）年山梨県警察部長当時根津と面識があり、根津に英才教育の学校経営をするように勧めた。根津はこれを喜んで実現しようと考え宮島清次郎、正田貞一郎と相談のうえ、内務大臣であった平田東助に援助を求めた。平田は臨時教育会議の主要なメンバーであった岡田良平、一木喜徳郎、山川健次郎、北條時敬らに相談した。<sup>(28)</sup>

こうして学校設立の準備は勧められ、根津氏は三六〇万円の基金を寄付して財団法人根津育英会を設立し、一九二一（大正一〇）年九月に認可された。

この時の法人の役員は理事長根津嘉一郎で、理事に正田貞一郎、本間則忠、宮島清次郎など顧問として、平田東助、山川健次郎、岡田良平、一木喜徳郎、北條時敬などであった。

このうち岡田良平と一木喜徳郎は兄弟であり、兄の岡田と北條とは第一高等学校で同級の親友で、岡田が山口高等学校騒動を治めるために校長として赴任した際、北條は教頭としてこれを助け後に校長となった間柄であり、また良吉は岡田、山川の京大総長のときに京大学生監として二人の総長を補佐した間柄であった。

それ故、良吉を全く新しい高等学校の教頭として北條が推薦した時、これらの人々によって是認され、信頼され、期待されて学校の運営をまかされたことも容易に想像できる。

良吉の帰国直後の彼の日記によると、一九二一（大正一〇）年七月二十九日に文部大臣岡田良平（初代校長となる一木喜徳郎の兄）を訪ねている。そこで、一木氏に面会することを求められた。それは、根津氏の高等中学校へ教頭たらん為なり。吉田熊次氏、沢柳氏等皆余を推せりといふ。

こうして、良吉は八月一日に一木喜徳郎から武蔵高等学校教頭への就任を要請された。一〇月三日一木校長に教頭就任受諾を伝える。この折り、教員は各種学校より採用し、決して学閥のごとき憂いなからしめざるべからざること……<sup>29)</sup>

設立当時、始め校名を東京高等学校として申請したが、文部省では官立の高等学校の名前に使いたいからとのこと、改めて武蔵高等学校と称することになった。

一九二二（大正一一）年同時に開校した官立の東京高等学校と共にわが国最初の私立七年制高等学校である。

こうして一九二二（大正一一）年四月一七日、武蔵高等学校は、前・内務大臣の一木喜徳郎を初代の校長として迎えて開校した。

一木校長は、開校式の式辞のなかで次のように述べた。

「高等学校の七年制度は臨時教育会議で私が極力主張したものであるから、校長を引き受けてこの任に当たすることは、言わば私の理想を実現するわけである。……

わが国の教育的欠陥は外国語に不鍛練なことである。最近国際連盟規約の批准事務を掌った私は特にそれを痛感し、現在の教育制度では到底「世界の日本人」を作ることには難しいと考へた。故に、新設の私立高等学校の特色をそこに求めて力を尽くしたい」<sup>30)</sup>

武蔵高等学校建学の理想として掲げられたのは

- 一、東西文化融合の我が民族使命を遂行し得べき人物を造ること
- 二、世界に雄飛するにたえる人物を造ること
- 三、自ら調べ自ら考える力を養うこと



の三つであった。

この理想は、既に述べてきたように、良吉が教師としての長年の教育実践のなかで芽生え、彼の長年の教育的信念である。

この三理想は、外遊中の彼の手帳に教育的信念として、記載されている。これを、武蔵の創設にあたって一木喜徳郎らの賛同をえて、《旧制武蔵高等学校の建学の三理想》として掲げたのである。

後に一九三七（昭和一二）年、《創立一五年の回顧座談会》で、山本は《三理想》について次のように述べている。「それは私の洋行の結果ですが、将来世界の文明が、二つ現れるだろうと云うのが私の考えであった。一つは東洋文明と西洋文明が東の方を廻って、日本で東西文明が新しい実を結ぶだろう。今一つは東洋文明が太平洋を渡って、アメリカで以て違った実を結ぶだろうと考えて帰ってきたものです。

その考へが第一節に入って居るのです。特にその頃は日本文化なんて云ふ考へは、不思議な話だけでも社会全体に於て今と較べると余程薄かったものです。

矢張りまだ文明と云えば西洋の文明と云ふやうな考へが、日本には満ちていたものです。

これはどうしても壊さなくちやいかんと云ふ頭があつたものです。

それで東西文化と言ったのですけれども実は西は付けたりで、東の方を揚げなければならぬと云ふことがあつたのです。

それから世界に雄飛する人間を作ると云ふ意味は、日本の文化、東洋の文化を世界にもっと揚げなくてはいかん。さう云ふ人間を作る必要があると云ふ意味です。植民に行く植民学校のような意味じやないのです。

第三は、これは久しく私がいろいろな学校を見て居りまして、どうも日本の学校は、暗記の学校になっている、暗記物なんと云ふ学科があるのですから。この暗記を廃止するような傾向にならなくちやいかんと云ふものを立てたの「<sup>(18)</sup>」<sup>(19)</sup>」<sup>(20)</sup>」

三理想の英訳は次の通りである。

The Three Ideals of the School

- i' To be properly equipped for the realisation of our national ideal which consist in the harmonisation of Oriental and Western culture;
- ii' To be prepared to act on the world-stage;
- iii' To cultivate the habit of original research and independent thinking.

この英訳は、良吉が英訳したものであった。一九六六（昭和四一）年に上梓された『晃水先生遺稿続編』の座談会によると、内田泉之助は「英訳は確かに先生ですよ。これができただ時、《これをもって今後英訳三大理想の正文とする》と、先生が私に申されたのを記憶しています<sup>(21)</sup>」と述べている。

初代校長となった一木喜徳郎から新設の七年制高等学校の校務を全面的に任された良吉は永年実践して来た中等教育への理想を実現しようと全力を尽くすのであった。

良吉は外遊中、特にイギリスに長く滞在しているが、パフリック・スクールに関心を持ちイートン (Eton) に範をとったともいわれている。良吉はイギリス流の紳士教育に感銘を受け、また国家中堅の人物の養成を目指すという

教育方針に共鳴したのであろう。

学科では英語を特に重視して低学年で一クラス二〇名づつに分け、語学教育の徹底をはかった。その他漢文は日本古来の文化に親しませるために重視した。

良吉は『武蔵高等学校二〇年史』に彼が理想として求め続けて来た教育理想の実現の教育方針を示している。

「一般学校では学科を細別し、一科を数目に分けて教授するが、それは生徒に纏まった知識を得させる道ではないとかんがえて総合教授法を取った。例えば国語、英語、数学のごとき科に於いて、読本、文法、作文といふ如く細別はしないで、読本を教える際、必要に応じて解釈以外の事も教える。従って例えば、文法の一科目についていえば、教室では、いはば、文法上の順序によらず、適當の語に出合ふ毎にばらばらに教へ、それを生徒自身の骨折りで纏めさすのを主とした。この骨折りによって生徒は纏める力がつくのであり、一般の学校にはそれが忘れられて居て、ただ暗記を主とする結果となつて居る。これが教育が立派な人物を造らぬ一原因である」<sup>33)</sup>

彼が石川県専門学校で受けた教育であり、その後教育実践から編み出された教育理論であった。

一九三一（昭和六）年三月二代目の校長山川健次郎が辞し、良吉は教頭兼校長事務取扱となった。

その後、六年間ものあいだ校長事務取扱を続けたのは何故か、名目共に校長になったのは一九三六（昭和一一）年二月二五日であった。

なぜ山川校長退任後すぐ校長に就任しなかったかについて「校長就任の辞」の中で次のように述べている。

「今日、全国の各種の学校を見ますと、校長は大抵は事務的人間でありまして小利口な、仕事のできる人間が全国の学校を経営して居る有様でありますので、せめて日本に一つくらいは社会の上下を通じて仰がれる人物を校長とする学校があつて宜しいと云う考えを持って居りました。幸いにこの学校は第一代の校長、第二代の校長、共にそう

云う方でありましたのでこの歴史をどうか続けたいと思つて居りました。私の素志は遂に達するを得ない状態になりまして、その点では私は残念と申しますか、済まないと申しますか、そう云ふ感じを持つております」<sup>24</sup>

ここに、校長に学校の最高の責任者としての品格を求めている良吉の意気込みを知ることができる。

私立学校の存在の意義について、一九三二（昭和七）年四月一七日の行われた開校十周年記念式の式辞で

「私共十年間かういふ学校に実際の教育を致して参りまして、そうして一般の教育界の事を見ますと、どうも遺憾に思ふ点が、かなり大きい点にあります。それは今の日本が果たして日本人を造るに適當な教育をしているかどうかといふ事であります。……

日本の教育は高等教育におきましても、普通教育におきましても、広い言葉でいえば思想上の無籍者（注・自分の考えを持たない者）を造る、籍のない人間を造るといふ結果になるのであります。……かういふ教育は、日本のためを考える時に、どうしても変へなければ成らぬものであります。……誰がこれを変えるのか。

これは到底官立学校・公立学校では出来ないことであります。……これをなし得るものはただ私立学校である。私立学校は法律の範囲内に於て、出来るだけ学校を良くし、結果を挙げて行くために、自由に考えを用いることが出来るのであります。そこに力を用ひる所に私立学校の存在の意味があると思つております。現に良い私立学校はさういふことをドンドン致して居るのであります。例えば私の知つております所で申しますならば、わが尊敬する成蹊高等学校があります。女学校で申せば、自由学園、かういふものは国家がどんなに金を出しても造ることはできません。これは全く私立学校が国家の教育に対する貢献の著しい例であると思ふのであります。

政府に於いても、学校は政府一つで出来るといふ大胆な考えを変えられまして、成るべく私立学校を奨励し、善良なる私立学校を造る人があるならば、相当な援助を与える、又奨励するといふ様な方法をお取りになりました、益々

良い私立学校のできるのを奨励せらるべきであらうと思ふのであります。……

私立学校が養成する良生徒は即ち国家の良民ではありませんか。……毛色が変わった、理想の異なった私立学校ができまして国家の教育を進めるのが、民族の利益であります。

文部大臣が御変りになる毎に、画一教育を廃するといふ話が起ります。しかし、今まで画一教育が廃められたことは一度もないのであります。……この武蔵高等学校の十年は極めて短い生命でありましたが、いささか日本の教育に對して貢献していると私は確信して居ります」<sup>(38)</sup>

私立学校の存在の意義を明確に述べており、政府に對して良い私立学校への財政的支援など訴えている。

さらに、良吉は一九三二（昭和七）年二月岩波書店編集部求めに応じ「高等学校教育問題シンポジウム」で次のように書いている。

「七年制が始めて定められた時は、私は自分の心配を発表した。それは七年間の変わり行く精神肉体状態に適應する教育を施すのは非常に困難であるまいか、七年間同一学校に同一生活を続けるきは生徒の心を他に誘導する恐れなきが主であった。わが国の七年制高等学校の経験は尚浅いから、十分な材料は得られないが、今までの事実で見れば、この心配は必ずしも乗り越え難いものではないらしく思われる。

それに反して、七ヶ年の青年期を一定の教育方針の下に置くことは、人物を發育さすうえに於いて少なからぬ便宜がある。特に私の觀察したところでは、小学校といはず、中学校といはず、入学試験勉強は生徒の人物を奇形にする。それは物その物を目的とせずして、他の便宜物を目的とさせ、それに仮にでも全力を集中させる必然の結果である。

七年制高等学校では、一度だけでもこの人物思想の奇形化を防ぎ得る。入学試験は人の競争勇猛心を刺激して、人

物養成上有効であるといふ論者もあるが、全力を便宜的なものに集中せしめる結果は、人物形成上決して喜ぶべきものではない。

入学試験を常に頭においていると、人生を一個の入学試験場と考へる習慣がつく。定まった仕事、命ぜられた事型の如くにはおこなふが、退いて深くその命令、仕事、施設の意味を根本的に考へ、それを改良する如き落ち着いた精神状態は弱くなる。わが社会は実にこの種の人の多きに困っている事は、考へのある人の一様に注意しているところであろう。

特に学科教授上よりいへば、……七年を通じて適宜に教材を案配するを得て、非常に有効であることは言うをまたぬ。この点についても、法規の拘束をもつと緩やかにし、法規制定者が考へたより以上の教授を實行し得る自由を与えることは国家の利益である。少なくとも教育者に、法規の外に立つてその改善を考へる習慣を与える。」<sup>(36)</sup>

この意見は、今日のわが国の中等教育に当てはまる見識である。

さらに、一九三三（昭和八）年三月二六日の第五回卒業式の式辞の中で良吉は、

「私は大学に入る諸君に付いてもう少し注文があります。人間の一生から考えれば大学の三年間は本の一小経験に過ぎない。……人生から見れば大学の講義も大事でありましょうが、日々の経験も同じく大事である。その経験を自らまとめ、人間はこうすべきである。我が一生はかういふ主義で送るのであると自らまとめ至った思想が一番尊いものである。学問でも何でもすべてやり放しはいけない。した事経験すべてをまとめ、そうして一生の信条と申しませんか、主義ともうしますか、どんな時でもこれだけは決して離れない、これを持って一生を貫くと言う、これが一番人間の大事なものである。かういふ信念とか主義とかは大抵一七・八歳から二五・六歳までに出来た信念は一生変わらなない。……何等主義信念のない一生を過ごす者は正信条のルンペンである。現実社会に如何に精神上のルンペンが多

いか。諸君らがここ四年、一方に於いて学問をする以外に、更に自分の信念、言い換えれば自分は如何に一生を送るべきかを考えて、それについてまとまった思想を造る。その思想を以て社会に出ると始めて役に立つ人間となつて役に立つ仕事が出来るのであります」と述べている。

日々の経験の大切さ、そしてその経験から得たものの尊さ、その尊さを自己の信条・思想として一生持ち続けて行くことの大切さを、良吉自信の若き日の体験を通して卒業して行く若者達に語りかけている。それは、まさに良吉の人生哲学であった。

この時期、良吉は武蔵高校において生徒の指導に献身しただけでなく、機会あるごとに自己の教育的信条をは発表してわが国の閉塞的時代の教育界の覚醒にも努めた。

良吉は、一九三六（昭和一一）年二月二五日に、第二代武蔵高等学校長山川健次郎が一九三一（昭和六）年に辞任して以来、校長事務取扱として校務に尽くしてきたが、第三代武蔵高等学校長にやっとな就任した。その理由については、既に述べたとおりである。それは、校長職に求められる資質能力に係わる良吉の深い信念からであった。

## 十、終焉の時

良吉は古希が近づくにつれて、自らの老いを感じるが多くなった。多くの卒業生が言うように涙もろく、演壇上で声を詰まらせることもしばしばあったという。

一九四一（昭和一六）年二月八日には、早朝ハワイの真珠湾攻撃により対米宣戦が布告されたが、自由主義者であった良吉の立場は微妙であったろう。昭和一七年二月のシンガポール陥落の際もよその学校と違って武蔵では派手

な行事はしなかった。戦時中、すべての学校で入学式や卒業式等の折りに、教育勅語の奉答や君が代斉唱などすることになっていたが武蔵ではしなかったという。ここにも教育者としての山本良吉の自由で闊達な気骨ある姿を見ることができよう。<sup>(38)</sup>

良吉の一九四二（昭和一七）年の日記によれば、この年の始めから体調がすぐれなかったように見受けられる。三月頃から床に就くことが多くなり、

四月 三日 昨日まで床にありしを本日入学式故出校

六月一七日 近來にいたりて胃の入り口の処、特に不安を感じ、其の為安眠を妨げられる感あり、或いは癌の類に

あらざるか。

七月 七日 午後胸中央部時々内部より表面を圧するとき激痛を感ず。……

七月 九日 痛みなし。ただし熱三七度に上がる。

以上で日記は終わっている。

そして、三日後の一九四二（昭和一七）年七月二日夜一〇時過ぎ、突然急逝した。享年七二歳であった。

「亡くなる晩は、何か書き物をしていましたが、「もうすぐやすむからお前ももうお休み」と言って、「応接間の鍵をかけた?」「ええもうかけました」「ありがとう」この有難うが胸に深く残て居ります。これが最後の父のこえでございまして」と語って居られる。<sup>(39)</sup>

西田のところへ七月一三日に良吉宅から死を知らせる電報が届いた。

その頃、西田の家に下宿していた西田の孫の教育学者上田薫氏の記憶によると、「親友の山本良吉氏がなくなったときなど（弱り方は）ずいぶんひどかった。ちょうど真夏の京都のことで、むんむんする暑さのなかを、祖父はうす



暗い廊下の板の間にへたりこむようにして、半日も動かなかった<sup>(40)</sup>という。

西田は病後日が浅いため旅行に堪えられず良吉の葬儀に出席することができなかつたので、弔詞を孫の上田薫氏に託した。

「山本良吉君は突然逝く。君は五十有余年の余無二の親友なり。十三日早朝君の急死の電報に接するや驚愕措く所を知らず。万感胸にせまり終日氷囊を頂いて臥す。徐に仕事を回想すれば歴々として猶君を眼前に見るが如し、今日此処に來り君の靈に告げんと欲するも病軀行旅に堪えず。書せんと欲すれども胸迫り筆進まず。昨秋以來余の病むや君深くこれを憂ふ。而うして今や君余に先んじて没す。嗚呼人生の事実今夕も期すべからざるなり。

昭和一七年七月一八日<sup>(41)</sup>

後に良吉のことをおもつて、悲しみのこころを歌二首に詠っている

「君ありと思へば心安かりき 相見ることの 稀なりし日も」

「君去りて誰とかたらむかずかずの 思まつはるこの頃の夜や」

鈴木大拙は武蔵高等学校の講堂での良吉の追悼の会で、良吉との幼い頃からの思い出を語った。「……最後に、私は今日校門から此処へくる時、この道を山本が何時も通っていたかと思つて、深い感慨が湧いた。今、絵葉書を貰つて写真を見て、また涙が出た。又今山本が晩年よく泣いたと云ふお話しであったが、それを聞いてもまた涙が出る。また自分もこの頃はよく涙がでるやうになつた。あなたがたも年を取つたら泣く時節が来る。そしたら人生が解るだらうな。その時に先生の教育の有難味も解るだらう。」<sup>(42)</sup>

此処で、晁水、大拙、寸心の石川県専門学校からの五〇数年に及ぶ三人の友情の絆は、切れてしまった。西田は終戦間際の一四四五（昭和二〇）年六月七日に死に、大拙は二四年後の一九六六（昭和四一）年の祥月命日に死んだ。

こうして明治・大正・昭和（戦前）の近代日本の隆盛期、そして敗戦を迎えるわけであるが、金沢の三羽ガラスの偉業は忘れることが出来ない。

とりわけ、山本良吉は西田幾多郎、鈴木大拙に比して、多くのひとに知られていないが、彼の教育理想の実現を目指した旧制武蔵高等学校は英才教育を目的として設立され、良吉は教頭として、校長として、国家有為の人材を育成することを念願として献身的にその教育理念を実践した。その教育理念は、今日武蔵学園の建学の理想として脈々として継承されているのである。

武蔵高等学校就任一九二二（大正一一）年四月から一九四二（昭和一七）年七月までの主な著書及び教育関係論文は、次の通りである。

《著書》『若き教師へ』教育研究会 一九二二年、『我が民族の理想』弘道館 一九二二年『新訓育論』教育研究会 一九二五年、『新国民作法』一九二六年、『中等教養』（巻一―巻五）弘道館 一九二八年、『学制改革論』教育研究会 一九二九年、『中等教養備考』弘道館 一九二九年、『勅語四〇年』教育研究会 一九三〇年、『新制女子公民教科書』教育研究会 一九三二年、『農村問題と教育との一考察』啓明会 一九三二年、『武蔵高等学校二〇年史』武蔵高等学校 一九四一年、『国民の教養』武蔵高等学校 一九四二年

## 一、気骨ある教育者の《教師論》

山本良吉の生涯は、明治後期から大正そして昭和戦前・戦中期、一九〇〇年代から一九四二年まで近代日本の教育の萌芽・発展期の中等教育を担ってきた教育実践家であり、中等教育の理論家でもあった。

既に述べたように、彼が生涯にわたって全生涯をかけたものには、数々あるが大きく云って二つある。一つは中等教育への多大な貢献であり、その成果は旧制武蔵高等学校の教育に収斂される。その教育理想は今日の武蔵学園の教育理念として脈々と継承されている。もう一つは、国家の有為な人材育成の礎となる教師の人格的資質能力の形成であった。

ここでは、良吉が理想とした教師とは如何なる教師であるか、その典型は、彼が学んだ石川県専門学校<sup>13</sup>の自由闊達で進取な教師たちであった。良吉が最も理想とした教師は、生涯の恩師である北條時敬（ときゆき）先生であった。

まず、彼の発表論文を通して述べてみたい。

（一）「科学教授法と教員検定」『教育時論』（三二四号、金田良吉、一八九四（明治二七）年四月。一〇～一三頁。）

「異日自ら知識を探求するを得る能力と、一個の人間としてのほづる所なかるべき道徳とを以てすべきもの……」

今の学校は即ち然らず。徒に生徒記憶の能を強くせんと欲し、教師朝夕其堂に講じて、頻りに生徒の筆記帳を大にし、生徒をして乾燥無味なる死字枯文の間に起ふく奔走して、復た他を顧みるにゆとりあらざらしむ。若し反復背誦、試験の場に臨みて、其の問題に応ずるを得れば無上の僥倖なり。試験今日終わらば記憶明朝去らん。

然れども決して自ら考え自ら為すの人たる能はざるなり。<sup>14</sup>

記憶中心の学校教育の在り方を痛烈に批判している。すでに、ここに武蔵三理想の一つである「自ら調べ自ら考え

る力を養うこと」の重要性を示唆的に述べている。

(二) 山本良吉の《教師論》の根本にある思想は、理想社会の実現であり、その担い手として教師を捉え、《社会の改革者》としての高い理想にもえる教師の育成であった。

「教師は皆一個の理想を有せざるべからず。とくに、倫理の教師たるべき者は確然不動の一理想を有せずは決して真に生徒を指導すべからず。一個の理想を有する者は妄りに人に従わず、文部省が参考書を与えたりとて、見て以て参考に供すべしと思えば即ちこれを取り、足らずと思えば則ち捨つ、取捨其意に在りて、少しもこれに制肘せられざるべし、而うして教育効果始めて挙がらむ」と、述べ、教師の高い理想にもとづく教育実践の在り方を述べている。

(三) 「教育家と理想」

「教育者は社会の理想化者なり、理想化するは即ち改革なり、教育者は実に社会の改革者なり、滔々たる教育者、此天職を知れる者これ幾何ぞ」と、教育者の使命は教育実践を通して理想社会の実現をめざすことである。

一一、若き教師への期待

良吉は新しく設立される武蔵高等学校の教頭として就任の準備に追われていた一九二二(大正一一)年三月に教育研究会から出版したものである。この中で良吉は新しく教師を志す若い人たちへの希望を述べている。

社会の改革者として教師を捉え、さらに、それを推進するために、教師を志す青年に贈った一書が『若き教師へ』(教育研究会、一九九二二(大正一一)年三月)である。

この書に生涯にわたる山本良吉の教師としての体験から生まれた心構えや教師としての喜び、教師としての誇りと

尊厳が見事に述べられている。

まず序文で次のように述べている。

「少し国の現状につ感ずる所があつて、座談の代わりにこの小冊子をかいた。書中説くところは皆世上ありふれた常套語のみで、何等珍しい事はない。

かわる常套語を今更吐きたく思わしめた事情については、私かに若い教師の注意を請ひたい。《教育は職人の仕事でもなければ、実習室の仕事でもない。わが社会をいかに改良すべきかは、現時ただ教師の真摯な苦心に待たねばならぬ》<sup>(46)</sup>と若いき教師への期待を明確に述べている。

第一、「高き理想に向かつて」

「胸中に燃え立つ理想を以て生徒を陶化し、学校を陶化し、《社会を陶化する》。これが教師の始めであり、終わりである。このほかには教師の生命はない。……」

教師が口述した知識や、校長が署名した証書や、いわんや行政官などが認めた免状には何等尊いものはない他人は尊くない者を尊くすることはできぬ。尊いものはただ自分の中から出る。免状を捨て、教科書を捨て、ノートブックを捨て、制服を捨て、辞令を捨て、——しかり一切諸君の所有を捨てて真の丸裸となつて、そこに何の尊いものがあるか、考えねばならぬのはそれである。……諸君は一切を捨て去らねばならぬ、全く丸裸とならねばならぬ。捨てて一切をすてた跡に残る《心の誠実》、《誠実な心から湧きでた理想》、諸君を尊くする者はただこれである。真面目な誠実な偽らなぬ中心、ただこれを以て教室に臨み、生徒に対し、又社会に対する、諸君の天職はただこれである。……翻つて諸君の心中には、いかなる教員も、いかなる教育法も決して消磨しえない本心の宝の存在するを思ひ。その

宝を磨くに従って光を発するものなるを思ひ。《人生の宝》はそれ以上にはないものであるといふ<sup>47)</sup>。教師は高い理想を心に秘めて、生徒を感化し教え導いて行くき、更に、学校をや社会を理想化してゆくことに全力を尽くすことに教師の本質がある。単なる知識や形式にとらわれず自己の内面の本当に尊いもの、誠実な心からわき出てきた理想に向かって生徒を高めて行く事が教師自身をも高めて行くのである。

### 第二、《子どもの無限の可能性の開花》

「教師は、まず自己を児童に適応せねばならぬ。しかし、教師は児童の御守り役ではない。教師に人間に関する一定の理想があり、その理想に向かって児童が伸び行くように世話をするのが教師の任務である。それは児童の本性に適応しなければできぬ。……」<sup>48)</sup>

教師はまず子どもの発達状態をしっかり捉え、理想に向かって子どもをのばしてゆくのが教師の努めである。

### 第三、《教師の人格の向上を》

「この宇宙に棄物はない。物それぞれその目的をもつて居る。その目的に従ってそれらを育成すれば、その本性を達しうる。……児童は百人百色である。しかしそれぞれ達すべき目的があるのであるから、その目的を告げしめるのが教育者である。教師の最大の任務がそこにある。教師の人格が低かったり、小さかったりすると、各々の物に目的を認めることができず……その結果、教師が人の個性を伸ばす代わりにそれを損傷することとなる。教師は如何なる性質をも、それ自身の価値に於いて身得る力がなくてはならない。それは自己の人格が児童のそれに比して非常に高いところに登らねばならぬ」と<sup>49)</sup>。

この宇宙を創造した造物主は決してむだな物は創っていない。まして子どもは百人十色である。子どもの個性を見分けるのは教師の最も重要な任務であるが、教師の人格が低いとそれができない。教師の人格の高尚さが求められる。

#### 第四、《官僚的気分からの脱却を》

「教師、特に若い教師は官僚的気分から全く脱却して欲しい。今の社会では、小使は外来人に対して官僚式である。校長は教師に対して官僚式である。……えらくなることと官僚式となること、他人の人格を尊重せぬこと、即ち、思想上、下劣となることが混同せられる観がある」<sup>(30)</sup>若い教師は決して官僚的になつてはならない。偉くなればなるほど、子どもの、他人の人格を尊重しなくては教師の品格が疑われる。

「児童の過去を知れよ、現在を知れよ、それと一になつてその未来を形成せよ、これが教師の真の任務である」<sup>(31)</sup>と述べている。

#### 第五、《理想の校長の資質とは》

「多くの校長に接せられる中には種々の性格を見られるであろう。何だか知らぬが、高い尊い所があつて、その人にあふとその人のために死力を尽くさねばならぬとおもはされる人がある。これが校長中の第一等の人物である。

実は私の三〇年の教員生活において、こんな校長にあつた事は余り多くはない。えらいにはえらいが、前の人ほど尊いとか高いとかは思わぬ。しかし、何からかは知らぬが、是非ともその人と共に学校を立派にせねばと思はせる校長は思うに第二等の校長といふべきであろう。別に偉くはないが、悪くもない。人物はまじめで、学校のためにも、生徒のためにも心配はしている。さりとて自分を動かす力もない。自分は自分の考えで、自分の力を尽くして学校

をよくすればよいのである。教師にかく思わせるのは世上普通の良校長で、第三等の校長でも尚天下の至珍として尊敬せねばなるまい。

見識もなく、学問もなく、誠実でもなく、金で教師を使はうとし、地位に対する申請権をもっているために、わずかに校長の地位にありうる。これを行政校長とも評してよからうが、かかる校長は第四等に相当するのである」<sup>22)</sup>。校長の見識とリーダーシップが求められる。

#### 第六、《教育的指導とは》

「先生が自然の態度で生徒に接すれば、生徒も自然の気分で先生に対する。生徒が云ってはならぬことを云えば、自然の空気がその不適當なことをおしへる。……礼儀や修養は教師が自分の身を以て示すのである。……生徒は規則や命令で圧迫されぬが、強い道徳的又は美的空気で引きしめられる。これが私共の希望する学校の訓練である」<sup>23)</sup>。教師が自らの生き方を身をもって示すとき、真の教指導は効果をあげることができる。

#### 第七、《教師は学術の探究者たれ》

「教師は学者ではない。しかし、相当に深い学問上の根底をもっていることは、教師その人の品格を高める。近来初等教育社の中に漸次種々の研究者の殖え来った事は誠に喜ぶべき現象である。……しかし、諸君がそれよりは更に骨折らねばならぬのは、学問考究の方法である。教科書には学問の本の上すみしか載せてない。その学問が何のため存在し、如何なる程度まで研究しつくされ、如何なる方法によって研究すべきかは、多くの教科書の問題以上となっている。従って、もし単に教科書のみ読み学び、それ以外に眼を出さぬならば、学問は方法もなく、動機もなく、



ただ無意義の暗記物となつてしまふ。かかる無意義の暗記物は決して我が興味を引き起すことも出来ず、それを如何程学んでも、わが人物に光彩を添えるわけには行かぬ」<sup>34)</sup>。教師は常に学問的探究心をもつて教育活動をするときに生徒の学びが本物となる。

第八、《教師を志す動機について》

「諸君が教師となられたのは、その真の動機が何にあつたか。地位か、名誉か、金か。もし諸君が金とか地位とかを求めて教師となられたならば、それ程間違つた考えはない。……

教師とならんとする動機は、外的に言えば、人類の将来を形成するの樂にあらねばならぬ。しかし、この樂はいかにして得られるか。ただ、わが感化によらねばならぬ。感化力は人物の光からくる。人物の光は、一は学問に対して、加速度的態度を取り得る程度まで進むにある……人の一生は夢の又夢とおわる。諸君は今に誠に立派な理想を抱いて居られる。今立派な理想を抱いていろとこの諸君中、幾人がその理想を抱いて墓中に入るか。理想は永遠である、生命は刹那である」<sup>35)</sup>。教師の仕事は、人類の永遠の課題に向かつて努力すること「未来への挑戦」の大切さを教えている。

第九、《教育者にとって《無償の宝》とは》

「教育には、深い考と温い情とを要する。それらは中から出るものである。自ら創造するものである。……教師の地位は真に貴い地位でもあれば、又真に卑むべき地位でもある。……教師の困難は、その地位の昇進のない事よりも、寧ろ教えた旧生徒の地位や思想や人物が進むに伴つて、自身のそれが進まぬ点にある。もし旧生徒が進むと同じ程度

で人物見識が進むならば、地位が何であろうとも、彼らの尊敬は、小学校の第一年でわれに對した時と同じであるに相違ない。實際の尊敬は決して地位や財産によりて左右せられるものではない。三十年、四十年、自分の手で扱ったその生徒が、たとひ十分の一でも、その尊敬をいつまでも続けるならば、われは社会を横断した大きな階級の首領である。大きな城の主人であると言つてもよからう。かかる名誉は教師以外誰がよく当るを得よう。……

私は常に教師の末席であることを非常に仕合わせと考へていたのであるが、この度の世界一周たびにおいてもっともそれを痛切に感じた。……（世界各国に行つても）至る所で、種々の卒業生に歓迎され、その世話によつて各国を気持ちよく何不自由なく視察できた。……

汽船がどこへついても、常に私ほど便利を受ける者にはないように感ぜられて、教師生活の有り難さが中心深く身にしみ込んだ。

教育は報を求めぬ仕事である。無償の宝を冥々のなかに積む。人生これより大きい仕合わせが又とあろうか」<sup>36</sup>

教師の仕事は、序文で述べているように、《教育は職人の仕事でもなければ、実習室の仕事でもない。わが社会をいかに改良すべきかは、現時ただ教師の真摯な苦心に待たねばならない。》大正自由教育の時代とは言われながらも、天皇制国家主義教育体制の浸透して行く時代状況のなかで、若き教師に、理想の社会を目指して、社会を改良することの必要性を説き、その担い手としての若き教師のただ真摯な努力を期待しているのである。戦前の閉塞的時代状況のなかで若き教師の力によつて理想の教育を実現し、未来にむつかつて理想社会を構想し構築しようと全力を尽くす良吉の姿に気骨あふれる教育者の典型を見る思いがする、と同時に「教師の崇高な使命」がある。

## 一三、良吉の教育的信念

彼の龐大な著書・論文をとうてい全部に目をとらすことは出来ないが、ここでは中等教育の実践者であると同時に閉塞した社会を拓き、教師に勇氣と自信と希望とを与えようと時代をリードした教育者として、良吉が生涯をとうして最も力を注いだものはなんであつたか考察しておきたい。

## 青年と訓練

「自分は教育とは、則ち『生活の力』を訓練することであると考え、大いに訓練教育を社会に唱道する必要があると感じているのである。訓練とは一寸見ると自分の力以上とも思われることに対し、自分で工夫し、骨折り、それに耐える力を自分から生み出すことである。人の力は、自分から働かせれば働かせるほど増して行くものであるが、働かされなければ、何時まで立っても其の限りで眠ってしまふ。

丁度鉱山の宝は、人が掘れば掘るほど出て来るが、手をつけずに置けば、夫きり地下に潜んで居ると同様である。其の地下に潜んで居る宝を掘り出すのは鉱山家の業務であると同様、自分の心の奥深く眠って居る力を自分の力で引き出すのが、人間の義務であつて、教育は即ち其の糸口を為すものである。」<sup>(57)</sup>と述べている。

さらに、この考えを進めて、『新訓育練論』（教育研究会一九二五（大正一四）年）の第七章『訓練の機関たる教師』のなかでは、次のように述べている。

「教師が訓練に関係する機関は、まず教授そのものである。教壇に立った教師の姿勢、態度、言語そのものが既に一種の影響を与える。これは教師には教授するとき自己威厳といふ如き自覚をもつべしといふのではない。かかる自覚は虚偽の態度を教師に与え、不誠実といふ印象を生徒に得しめる。……しかし、教師が生徒に見せよ

うとも思わず、銜う心もなく、一心不乱になっているその態度は、必ず生徒にあるものを与えるに相違ない。実に、真のよい感化は人が一心不乱になって居るとき以外には、与えられぬ。……真を愛するのは学問上の誠である。生徒にわからせようとするのは人の愛である。……

従来の教育においては学校は、生徒を教育し、生徒は教育を受ける者と考えられた。

今は、教育は生徒が受けるものではなく、生徒は自己を教育するもの、学校は生徒の自己教育を指導するものと考えられてきた。従って、訓練も、また、学校が加えるものでなく、生徒自ら行うべきものであり、学校は、ただそれを支援し指導すべきものとなった<sup>38)</sup>。

そして、こうした考えのもとに、良吉が生涯をとして最も力を注いだのは《修身科》であった。一九〇九(明治四二)年一〇月に『中学修身教科書』を著して以来『大正女子修身』『大正中等修身』『中等教養』など、社会の変化に応じて修身教科書を改定してきたが、最後の著作となったのは一九四二(昭和一七)年三月に刊行した『国民の教養』であった。

その序文に、

「私が初めて修身の教科書を出したのは明治三〇何年かであった。それからずっと修身の教授を担当してきたが、稿を改めても改めても、安住の処は常に千里白雲の外にある。疲脚には前路が遠い、しばらくここに杖を立てて一休みする。老いの欲には、できることなら、この書をただ生徒ばかりでなく、他の人々にも見てもらいたい気持ちがある。一束の糜紙、用がすんだら取って炉中に投ぜよ<sup>39)</sup>」

この『国民の教養』は良吉の数多い著述のなかで最も心血を注いだもので、世間一般で言う所謂修身書と類を異にしているもので、いわば良吉の長い教師生活の教育理念の結晶ともいえるべきものである。

『国民の教養』に「巻一」の冒頭で「われ等は一生よい人間でありたい。よい人間とは、物のわけがよくわかり、そして恥ずかしくない行いをする人である」と述べ、さらに、最後の「巻五」において、人の生き方について良吉の理想の境涯を語っているが、人はみなそれぞれどんな人でも無限の可能性を秘めて未来に向かって進歩・発展して逝かねばならない。そのためには他人の模倣のみに満足せず、自分の力を未来に向かって十分に発揮してより高いものを創造せねばならないと述べている。つまり、青年期における未来に向かつての主体的自己形成を意味している。ここに良吉の教育理念の特徴を見いだすことが出来る。

ここで、山本良吉の教育理念の根本にある概念は、『誠さ』『善良さ』『品位』『高い理想』そして、『向上心』であるといえる。

教師の心得として挙げている。

第一に、教育の本質は、『教育技術や学び方ではなくて、学ぶ者と教える者の《心のきずな》の形成である。つまり、教師と生徒との《信頼》と《尊敬》が教育の根本であるという。第二に、教育は、生徒が受けるものではなく、生徒は自己を教育するもの、学校は《生徒の自己教育を支える》ものである。

第三に、自己形成の中心は、自ら調べ自ら考える力を養うことである。

第四に、『若き教師』の職業倫理は教師という職業に『誇り』と『誠実さ』と『高きこころざし』をもつことであるという。

## おわりに

西田幾多郎・鈴木大拙そして山本良吉らの少年時代から五〇数年におよぶ友情の絆は、山本の突然の死、西田は敗戦間際の昭和二〇年六月七日、鈴木は二四年後の昭和四一年に亡くなった。西田は、近代日本を代表する哲学者として、鈴木は、日本を代表する宗思想家として広く知られている。

しかし、山本良吉は、二人にくらべてその多くを知られてはいないが、一つには旧制武蔵高等学校の創成者として、他は明治後期から大正、そして昭和の戦前・戦中期において、中等教育についての数多くの自らの実践に基づく教育理論を著書として、さらに当時一流の教育雑誌『教育時論』『教育学術界』『教育界』『公民教育』などに次々に所信を発表し、中等教育の改革に尽くした。かれの教育理念は、当時中等教育界に流布していた暗記主義・管理主義を排し、生徒が自ら主体的に自己の内在的無限の可能性を自分の力で十分に発揮して、他人の模倣ではなく、自己の主体的信念にもとづいて、より優れたものを創造することをねらいとしていた。

そういう教育を実践することによって、一貫して国家有意の人材を育成することを念願として献身的にその教育理想の実践に努めたことは高く評価できる。

こうした山本良吉の教育理想は、現在の武蔵学園の高校・中学校、大学の教育理念として継承されている。

一九六五（昭和四〇）年に学長に就任した正田建次郎氏は《武蔵の教育理想》について、次のように述べている。「国際的な感覚と知識を身につけた人材を生み出す。身につけるためには自主的に調べ、考えなくてはならない。

これが武蔵大学の建学以来の理念であり方針である。……大学では自己を社会との関連に於いて確立し、併せて社会の一員として役立つ専門の知識技能を身につけること、それ自体を目的として専念すべきである。……本学の教育理

念として重視してきた国際的感覚の重要性は、益々強調すべきであろう。学校においては、大学に限らず、ともすると知識を偏重するきらいがある。知識はそれが働かされて初めて効能があるので、そのためには感覚にまで深められていることが望ましい。換言すれば身についたものにするのである。自ら調べ自ら考えるところ、本学の教育方針はそのためのものであり、知識の切り売りの、書物を読んで事足りるような教育は本学の取らざるところである。<sup>(4)</sup>

今日、わがくにの教育が、混迷しているなかで《二一世紀を担う人材をどう育てるか》大きな課題である。とりわけ、教育の場の荒廃と理念の喪失、教師の資質・能力（教師力）、教師の教育者としての信念が問われているとき、山本良吉が明治二〇年代から大正・昭和戦前・戦中の閉塞的時代状況のなかで主張し実践した教育理念は、二一世紀初頭に生きる誠実な教師たちの教育的真実の探求の指針となり得るであろう。

備考

(一)

本稿は二〇〇八年六月二六日武蔵大学人文学会研究会で報告したものに加筆したものである。

(二)

この拙論を書くにあつたて、故伊能敬教授（一九二六～一九九五）に感謝したい。と言うのは四半世紀前、武蔵大学に赴任したおり、教授会で隣の席に居られた伊能教授から始めて、山本良吉先生のことをお聞きした。その後、伊能教授は山本良吉先生の修身の授業のこと、そして厳しい先生であったが、ひとり一人の生徒の内面を大切にしてく

れたことなど、平素の日々の大切さなど教えられたという。伊能敬教授は、旧制武蔵高等学校に一九三八（昭和一三）年四月に入学され、終戦の年一九四五（昭和二〇）年三月に卒業し、旧制東京大学第一工学部応用化学科に進学している。この拙論は、伊能教授のお話しを伺わなかったら発表する事はなっかたであろう。そうした意味でいまは亡き伊能敬教授に心から感謝する次第である。

(三)

『若き教師へ』一九二二（大正一一）年を、山本良吉先生のお孫さんである尾形憲・明治学院大学文学部教授が、現代の学生のために読みやすい口語文に書き直して一九九五年に出版した。

尾形教授は、武蔵大学に私を訪ね口語文『若き教師へ』一〇〇部を武蔵大学で教師をこころざす学生に渡して欲しいと言って寄贈して下さった。尾形憲教授は、現在・明治学院大学名誉教授である。

(四)

『旧制武蔵高等学校創立者文献目録』（No 11）『山本良吉・人物文献目録』鈴木勝司編（全二八頁）（武蔵学園記念室）には、多数の著書、著述（雑誌・論文、論説、講演）、伝記、人物評、遺稿集など詳細な文献目録がつけられている。

《参考文献》

上田 久 『山本良吉先生伝』私立七年制武蔵高等学校の創成者』南窓社 一九九三年

浅見 洋 「母への努めを果たした人生」気骨あ触れる教育者・山本良吉」『北国文華』（一九九八年十一月号）

拙稿「学祖とその時代・山本良吉と旧制武蔵高等学校」『月刊・私学公論』私学公論社（一九九一年九月号）



- (注)
- (1) 山本良吉「五〇年回顧」『二六年』『晁水先生遺稿』故山本先生記念事業会 編者内田泉之助 一九五二年 一二頁
  - (2) 同上 一三頁
  - (3) 同上「七十自述」『晁水先生遺稿』三二頁
  - (4) 西田幾多郎「山本晁水君の思い出」『西田幾多郎全集』岩波書店 第二卷二四五頁
  - (5) 浅見 洋「母への努めを果たした人生／＼気骨あふれる教育者・山本良吉」『北国文華』一七号 二〇〇三年 二〇五頁
  - (6) 西田幾多郎「山本晁水君の思い出」『西田幾多郎全集』岩波書店 第二卷二四七頁
  - (7) 森 有礼「第四高等学校開校の式辞」『歴代文部大臣式辞集』所収 文部省 一九五九年
  - (8) 西田幾多郎「山本晁水君の思い出」『西田幾多郎全集』岩波書店 第二卷二四七頁
  - (9) 浅見 洋「母への努めを果たした人生／＼気骨あふれる教育者・山本良吉」『北国文華』七号 二〇〇三年 二〇三頁
  - (10) 西田幾多郎「ある教授の退職の辞」『西田幾多郎全集』岩波書店 第二卷一七〇頁
  - (11) 暁鳥 敏「山本先生の思い出」『晁水先生の追憶』故山本先生記念事業会 一〇頁
  - (12) 山本良吉「五〇年回顧」『二六年』『晁水先生遺稿』編者内田泉之助 一九五二年 二六頁
  - (13) 同上 二七頁
  - (14) 金 蹉蛇(山本良吉のペンネーム)「ジャン、ジャック、ルソー」雑誌『史海』三二号 一八九四年二月号 三四～六四頁
  - (15) 同上 五五頁
  - (16) 西田幾多郎「山本晁水君の思い出」『西田幾多郎全集』岩波書店 第二卷二四八頁
  - (17) 『静岡民友新聞』一八九八(明治三一)年五月二二日の記事
  - (18) 「山本教諭寄宿舎改良」『静岡中学校高等学校百年史』静岡県立静岡高等学校編上巻 二九四頁
  - (19) 竹内薫兵「回顧五十五年」『晁水先生の追憶』故山本先生記念事業会、四頁
  - (20) 『静岡中学校高等学校百年史』静岡県静岡高等学校編上巻 四三二頁
  - (21) 同上
  - (22) 中山再次郎「二中創業の元勳山本良吉先生」『晁水先生遺稿続編』山本先生記念会 川崎明編 一九六一年 五〇四～五〇五頁
  - (23) 京都府立第二中学校校友会「学友会誌」第一号 一九〇一年 一七頁
  - (24) 山本良吉「至誠説」京都府立第二中学校「校友会誌」二号 一九〇二年、『晁水先生遺稿』川崎明編 一九六一年 四五三～四五六頁

- (25) 鈴木大拙「君が自ら学校を立てんと言ふ、大に可し」『鈴木大拙書簡五二』(一九〇二年二月二七日)
- (26) 山本良吉『わが民族理想』弘道館 一九二一年
- (27) 臨時教育会議、一九一七(大正六)年九月二四日に、第一次世界大戦後の教育改革を断行するための教育策定を目指して発足した寺内正毅内閣総理大臣の教育諮問機関である。一九一九(大正八)年三月二八日の最終答申まで、初等教育・高等普通教育・大学教育・師範教育・女子教育・実業教育・通俗教育などにつき審議がなされた。大正期から昭和初期にかけての主だった教育改革はみなこの会議で審議を重ねた諸提案に基づき推進されており、極めて重要な諮問機関であったと言える。
- (28) 『武蔵大学五十年史』武蔵大学五〇年史編纂委員会 二〇〇二年 一―二頁
- (29) 山本良吉『晁水先生遺稿統編』山本先生記念会 川崎 明編 一九六六年八〇三―四頁
- (30) 一木喜徳郎『武蔵高等学校六〇年のあゆみ』七頁
- (31) 山本良吉「創立一五年の回顧座談会」一九三七年、三理想については「第一七回入学式式辞」(二〇三八年)で、本校の教育方針として新生に詳細に説明している。『晁水先生遺稿』故山本先生記念事業会 内田泉之助編 所収(一九五一年)
- (32) 川崎 明編『晁水先生遺稿統編』山本先生記念会 一九六六年 八一八―九頁
- (33) 山本良吉『武蔵高等学校二〇年史』一九四二年 七頁
- (34) 山本良吉『晁水先生遺稿』故山本先生記念事業会 内田泉之助編 一九五一年 二九三頁
- (35) 同上 二七二頁
- (36) 山本良吉「高等学校教育の問題シンポジウム」『岩波講座教育科学』岩波書店 第一七冊 一九三二年 五五―六頁
- (37) 山本良吉「第五回卒業式の式辞」『晁水先生遺稿』故山本先生記念事業会代表 内田泉之助編
- (38) 一九四一年当時、武蔵高等学校生徒で山本良吉校長の薫陶を受けていた伊能敬教授は学校生活の様子をかつて筆者に語ってくれた。
- (39) 尾形はじめ『晁水先生遺稿統編』山本先生記念会・川崎明編 四〇八頁、尾形はじめは山本良吉の長女で、明治学院大学尾形憲名譽教授の御母堂である。
- (40) 上田薫「祖父のこと」『同時代の記録』岩波書店 二八八頁
- (41) 西田幾多郎「山本良吉氏弔詞」『西田幾多郎全集』第一三巻 一七五頁
- (42) 鈴木大拙「思出話」『晁水先生遺稿』故山本先生記念事業会 内田泉之助編 一一頁
- (43) 金田良吉「科学教授法と教員検定」『教育時論』三三四号 一八九四(明治二七)年四月号 一〇―三頁 この年一〇月四日に山本なおの養子として入籍、山本姓となる。

- (44) 山本良吉「倫理教科書の査定」『教育時論』一八九七（明治三〇）年五月号 一六〇頁
- (45) 山本良吉「教育家と理想」『静岡県教育協会雑誌』第一七〇号 一八九九（明治三二）年二月号 一頁
- (46) 山本良吉「若き教師へ」教育研究会一九二二（大正一一）年四月序文、この書は大正二一年に発行されている。昭和四年九月に増補改訂版六版が発行されていることからしても、当時の教育界では注目されたことが推測できる。さらに末巻に山本良吉先生著書として、大正一四年に刊行された『新訓練論』について次のような解説がなされている。「従来の教育に於いては学校は生徒を教育し生徒は教育を受ける者として考えられたが、今は教育は生徒が受けるものではなく生徒は自己を教育するもの、学校は生徒の自己教育を指導するものと考えられてきた。従って訓練もまた、学校が加えるものではなく生徒自ら行ふべきものであり学校はただそれを指導すべきものとなった。本書はこの立場から学校のあらたな訓練論を述べたものである」と。その他、『新国民作法』（大正一五年）『公民教養』『学制改革論』（昭和四年）など当時の教育現場への影響は大きかった。
- (47) 山本良吉「若き教師へ」教育研究会 一九二二（大正一一）年四月 一頁
- (48) 同上、一〇〇～一〇一頁
- (49) 同上、一九〇～二〇頁
- (50) 同上、二二頁
- (51) 同上、三九頁
- (52) 同上、四五～四六頁
- (53) 同上、六〇～六一頁
- (54) 同上、六六～六七頁
- (55) 同上、八一～八四頁
- (56) 同上、一〇五～一〇六頁
- (57) 山本良吉「青年と訓練」『地方青年』一九二四（大正三三）年第一号、序文
- (58) 山本良吉「新訓練論」教育研究会一九二五（大正一四）年、第七章 一〇六～一〇七頁
- (59) 山本良吉『国民の教養』武蔵高等学校発行 一九四二（昭和一七）年三月序文、この年の七月二二日夜、狭心症のため急逝する。「この『国民の教養』は山本良吉最後の著書となった。再録『梶水先生遺稿』編者内田泉之助、故山本先生記念事業会（一九五一（昭和二六）年）『国民の教養』再録されている。編者の言葉によれば、「先生の数多い叙述の中で最も心血を注がれたもので、世の常の所謂修身書とは類を異にし、いわば先生の長い教師生活の結晶ともいふべきものである」と、述べている。

(60) 同上、第一巻の冒頭のことば、一頁

(61) 正田健次郎「武蔵の教育理念」『武蔵をめざす友へ』武蔵の青春群像／No.4』武蔵大学事務部 一九六七（昭和四二）年二月 二～三頁  
（二〇〇九年二月二日提出）